

(様式1)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	京都府	番号	26
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
八幡市	中央小学校	274

※ 児童生徒数については、今年度、協力校に在籍する児童生徒数を記述する。

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 研究指定校事業連絡協議会

平成28・29年度及び平成29・30年度「学力向上システム開発校」研究指定校20校による連絡協議会において、研究協議を通して研究開発についての共通理解を図り、各校における課題や研究の進め方について協議することにより、主体的かつ効果的な研究推進に役立てた。

(2) 京都府教育委員会指定「学力向上システム開発校」交流会

平成28・29年度及び平成29・30年度「学力向上システム開発校」研究指定校20校の研究の進捗状況や成果・課題を交流し合うことを通じて、京都府教育振興プランに示す教育課題の解決の方向性を確認するとともに、府内への効果的な普及を図るための交流・協議を行った。

(3) 指導方法の改善に関する研究協議会（年2回）

京都式少人数教育の趣旨を生かした児童生徒の実態に応じたきめ細かな指導を実施するための指導体制や方法、その他、実施上必要な事項について協議し、学力向上に向けた効果的な指導の在り方を探り、授業改善に役立てた。

(4) 山城局学力向上対策会議（※推進地区の八幡市は山城地域に位置する。）

質の高い学力の育成を目指して、山城地域の小中学校における学力の充実・向上の取組を交流し、その一層の推進を図った。

【内容】学力向上担当者会議（学力分析）、授業実践に関する交流、模擬授業及び研究協議

(5) 山城局「山城授業スタンダード」の作成・配布

主体的・対話的で深い学びに繋がる授業スタンダードについてのパンフレットを作成し、管内全ての教員に配布した。

(6) 研究発表会等に係る指導・助言

研究発表会や調査官訪問に際しての事前資料の検討や、実施の際の指導・助言を行った。

2. 推進地区における取組

- (1) e スクール構想⇒学力の向上を目指す効率的で効果的な取組と ICT<情報通信技術>を活用した教育の推進
 - ・各校の学力向上プランシートに基づき、各校の学力向上に関する計画・取組・成果と課題についてヒアリングを実施した。（年度当初と年度末は管理職を、年度中間については教頭と教務主任を対象）その効果測定として年度末に CRT（全国標準学力検査）を実施する。
- (2) 連携型小中一貫教育
 - ・各中学校キャンパス（各キャンパス中学校 1 校・小学校 2 校）で、学力向上の取組をはじめ、小中 9 年間を見通した取組を継続的に実施した。
 - ・各キャンパスにおいて、小中学校相互の授業参観等を行い、小・中学校 9 年間を見通した指導について検討を行った。
 - ・平成 28 年度は、協力校を含むキャンパスにある八幡小学校で行われた『平成 27・28 年度京都府教育委員会指定「学力向上システム開発校」算数科教育研究発表会』に参加し、問題解決型学習について深く学ぶ機会を持った。
- (3) 市教委指導主事による学力分析(全国学力・学習状況調査、京都府学力診断テスト、CRT(全国標準テスト)とそれに基づく学校への指導・助言
 - ・各校の状況を集約し、市内全体の学力分析を行うとともに、集約した結果をもとに「e スクール構想」に係るヒアリング等の機会を捉え協議を進めた。
- (4) 学習支援員配置事業
 - ・市単独事業として、学力定着に向けた取組を進める上で必要となる学習支援員を市内小・中学校に適宜配置をした。
- (5) 生活保護受給世帯向けの学習支援（中学生対象のスタディサポート事業<数学・英語>の実施）
 - ・「子どもの貧困対策の推進に関する法律」及び「京都府子ども貧困対策推進計画」を踏まえ、子どもの将来がその生まれ育った環境によって左右されることのないよう、また貧困が世代を超えて連鎖することがないよう、教育の機会均等を実質化するため、昨年度は八幡市内 1 会場で行っていたスタディサポート事業を 2 会場（本年度受講者数 102 名）にし、学力向上を図っている。しかし現状としては、102 名以外の受講していない生徒を各校で個々学力向上に取り組んでいるものの、いかにして学力定着に課題を抱える生徒の学力を付けていくのかが大きな課題が残ったままである。
- (6) 八幡市オリジナル教材「春休み課題ドリル（国語・算数）」の配付
 - ・1 年間学習してきた内容が復習できる「春休み課題ドリル（国語・算数）」を市内の全小学校 1 年生～6 年生に春休み前に配付し、春休み期間中に取り組ませ基礎基本の定着を図っている。
- (7) 協力校に対しての指導主事による指導・助言
 - ・協力校には日常から指導内容について状況把握を行うとともに、必要な指導・助言を行う体制をつくってきた。
 - ・特に、協力校に指導・助言をいただく大学教授（早稲田大学教職大学院の田中博之教授）が、訪問される機会を中心に担当指導主事等が訪問し、研究会への参加や管理職とともに

大学教授との今後の指導について話し合う機会を確保してきた。

- ・「研究実践集」「研究実践パンフレット」「学習指導案」作成に関して、構成・内容等について指導・助言を行った。

3. 協力校における取組

(1) 授業改善の取組

ア ユニバーサルデザインの視点に立った授業改善

子ども一人一人の個性と能力に応じた教育を行うために、平成 26 年度から全学年でアセスメントシートを活用し、学習につまずくおそれのある児童を事前に予見し、予防的にかかわることができるようにするとともに、学級集団の学習にかかわる諸能力の全体的な特徴を把握し、それに応じた指導・支援を導き出した。

イ 主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善

- ・主体的・対話的に深く学び合うための授業改善について、国語科の「書くこと」において全学年、全クラスで公開授業を行い、早稲田大学教職大学院の田中博之教授を外部講師として招聘し、指導助言を受けながら、校内研究を進めた。
- ・授業での話し合いでは、3人〈司会・記録・報告〉組（トリオ）で行った。
- ・教師自身も研究会に主体的に参加するために、事前研では、指導案の検討は全員で行い、授業のゴールを明確にし、授業の中でのしかけ・山場の設定、課題のある児童への手立てを2つのグループに分かれて検討した。事後研では、グループで考えた手立てが有効であったか、しかけ・山場の設定はどうであったかを話し合い、次の授業研にどうつなげていくかをまとめた。
- ・授業評価シートをもとに授業改善を進めるため、全教職員が授業を参観し、授業評価アンケートを実施した。授業評価結果を可視化できるレーダーチャート〈レーダー型グラフ〉で示し、良い点や改善点を知り、授業改善につなげた。

(2) 基礎学力定着の取組

ア 「家すた(家庭自主学习)」の取組

本校の実態として、家庭学習が定着していない実態がある。学校で学習したことを復習する、自分の興味関心のあることをさらに調べる等、1年生から6年生まで全校一斉に「家すた」専用のノートを作って家庭学習に取り組んでいる。

家すたを活発にするために、毎月30日を家スター祭として設け、この日を〆切とした一か月の家すたを表彰した。全校児童の意識を高めるために、“家スター祭の歌”を作り、1週間前からお昼の放送で流した。

また、毎月行われる児童集会「すまいる集会」で、一か月間家すたに一生懸命取り組んだ児童を表彰したり、その家すたノートを実際に紹介し、よい家すたノートの書き方や、取り組むテーマの例などを広める機会を設けた。表彰者には、家すたノートに貼る用のシールを授与し意欲を高めた。家すたを浸透させるには、家庭の協力も必要なため、月1回の家すた通信を発行し、啓発を行った。保護者の声としては、「どんなことを家すたでやらせればいいのか分からない」というものが多い。そのため、他の児童に参考になる家すたのノートを通信で紹介した。学校でどのような学習をしているのかを知ってもらい、家

庭と連携しながら取り組んだ。

イ 「スタディ道場(補習)」の取組

学習に困難を抱える児童を対象に、学力の底上げを目的として、「スタディ道場」と称した補習を行った。毎週、火曜日に全教職員で取り組み、今年度は算数の計算領域を中心に学習した。また、個人ファイルを用意し、毎回の課題を綴じて自分自身の頑張りを振り返られるようにしている。

補習では、プリント教材を中心に、前学年までの復習や現在の学習内容の補充、次時の予習などを取り入れた。時には、個別の課題に対応したプリントを用意して、個に応じた学力の底上げを図った。

参加している児童は、次時の予習ができることで自信を持って授業に参加できるようになり、補習で学んだことが授業に活かされるため、やる気につながった。また、授業中の発表が増えた児童もいて、学習に課題がある児童が主体的に学習に取り組めるようになり、とても有効だった。児童は補習を楽しみにし、前向きに取り組む様子が見られた。

ウ 昼すたでい(昼すた)の取組

本校の特色ある取組の一つに、昼の学習タイムに位置付けているモジュール学習がある。これを本校では「昼すた」と呼び、言語力育成のために全校で取り組んでいる。毎週、月・火・木・金の昼の時間を活用し、時間は13時35分から13時50分までの15分間の取組である。短時間だが、集中して行っている。以下、各曜日の取組である。

月・・・漢字・漢字フラッシュカード・辞書引き
火・・・フリートーク
木・・・文法
金・・・文章読解

(3) 学級力向上の取組

ア 学級会における話し合い活動の構造化

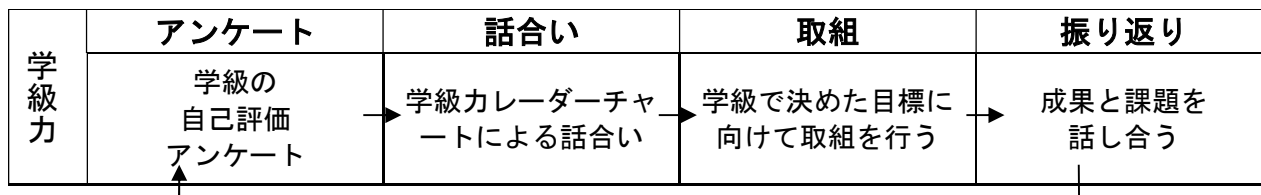
個々の意見を尊重し合い、互いの立場や意図をはっきりさせながら話し合える児童の育成を目指して学級活動を進めた。学年進行により、クラス集団や担任が替わっても同様に話し合い活動が進められるように、本校の児童の実態を把握し、全ての学年において系統立てた指導が行えるように、学級会進め方シートや板書計画の型を学級経営部より提案し、活用できるように環境を整備し、話し合い活動の構造化を進めた。

イ 学級力向上プロジェクト

学級力向上プロジェクトとは、児童が学級づくりの主人公となって、目標達成力、対話創造力、協調維持力、安心実現力、そして規律遵守力からなる学級力を高めるために、学級力アンケートで自分たちの学級の様子をセルフ・アセスメント(自己診断・自己評価)することを通して、毎日の学習や遊びの中で意図的・計画的に取り組む実践的な仲間づくりの活動である。具体的には、この学級力向上プロジェクトは、クラスの児童が、「笑顔があふれ、明日からも来たくなる明るい学級」を協力してつくり上げていく協同的な学習である。また、学級力に含まれる5つの力、目標達成力、対話創造力、協調維持力、安心実現力、そして規律遵守力【目標をやりとげる(達成力)、話をつなげる力(対話力)、友達を支える力(協調力)、安心を生み出す力(安心力)、きまりを守る力(規律力)】を示した学級力アンケートの結果をレーダーチャートで可視化して診断し、その改善に向けて子どもたちが動き出す、自律的な学びである。学級力アンケートによる学級力の自己評価、学級力レーダーチャートをもと

にして話し合うスマイルタイム、そして学級力向上のために児童が主体的に取り組むスマイル・アクションという3つの活動を、R-PDCA（診断・計画・実施・評価・改善）サイクルに沿って意図的・計画的に実践する協同的な問題解決学習である。各学期でこのサイクルを1回実施した。

プロジェクトの流れ



ウ フリートークの取組

フリートークは「前向きに他者と関わり、行動する姿勢を育むために、コミュニケーションの具体的な手法を学んだり、段階を踏んで自分の考えを整理し話すための力を育成したりする」ことを目的として取り組んだ。

目的達成のため、1年目（平成27年度）は、「自分の思いを出せるという安心感や伝えることの楽しさを味わう。」2年目（平成28年度）は、「思いを伝えることの楽しさを味わいながら、学年や学級、個人の実態に合った内容で、コミュニケーションの具体的な手法を学ぶ。」3年目（平成29年度）は、前年度までに学んだことを活用し、「さらに思いや考えを伝えたり、聴いたりすることの楽しさを味わう。」というプロセスで行った。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

- 平成29年度全国学力・学習状況調査の国語A・Bにおいて、平成28年度の全国平均との差を国語Aは2.7ポイント、国語Bは0.3ポイント縮めることができた。
- 平成29年度全国学力・学習状況調査の国語Aの評価の観点「書く能力」については、平成28年度の全国平均との差を21ポイント縮めることができた。
- 平成28年度末に実施したCRT(全国標準学力検査)の国語において、2年は1.3ポイント、4年は4.2ポイント、5年は5.2ポイント平成27年度結果を上回った。同一児童での推移で見ると、3年は0.1ポイント、5年は4.2ポイント、6年は4.7ポイント平成27年度結果を上回った。
- 国語アンケートの下記の項目において、「当てはまる・どちらかと言えば当てはまる」と答えた児童の割合が増えた。
 - 国語は好きです。52.9% → 74.8%
 - 文章を書くことが好きです。52.2% → 71.1%
 - 自分の考えを話すことが好きです。49.6% → 71.5%
 - 友達と話し合っ、文章を作ったり、まとめたりすることが好きです。60.1% → 76.8%
- 平成29年度は、平成27、28年度のように学級の状態が落ち着かないという学級はなく、すべての学級において、学級力向上の取組を進め、基盤となる学級経営が安定した状況の中で、

ユニバーサルデザインの視点及び主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善の取組を進められるようになった。

- ・学校全体に、「もっと勉強ができるようになりたい」という雰囲気が出た。課題のある児童も、「分かってほしい」という意欲が高まっている。
- ・研究授業のスタイル、事前研や事後研の持ち方の改善により、教師も主体的に授業改善に取り組めるようになり、授業ごとに成果と課題をまとめ、次につなげることができている。また、学力テストの分析では、学年の系統を意識し、組織的な授業改善の方法について考えることができている。
- ・「家すた（家庭自主学习）」の取組については数年かけて定着し、内容も少しずつ充実してきており、放課後の補習も含めて、学力向上、主体的な学びに結びついてきている。
- ・「書くこと」「対話力」についても、本校独自の系統表を作成することができたことは、大きな成果である。
- ・中学校キャンパス内でお互いに授業を参観し合ったり、教科指導や生徒指導について協議するキャンパス会議を行ったりすることで、小中9年間を見通した取組が進んだ。

2. 実践研究全体の成果

協力校が行った「学力定着に課題を抱える児童生徒に対する効果的な学力向上支援策」を研究課題とした取組は、授業改善、基礎学力定着、学級力向上という柱を有しているが、児童に対する学力の定着を包括的に行う手立てとしてその軸を失わずに取組み、その全てがシステム化されつつある状況である。質問紙調査結果から、協力校の授業改善や、学力向上の根幹である学級・学年の雰囲気の改善が進んでいることがわかる。引き続き生活全般の指導とともに校内システム化が進むと期待できる。

学力の定着という点では、

全国学力学習状況調査による前年度児童との比較で、

- ・平成 29 年度全国学力・学習状況調査の国語 A・B において、全国平均との差が前年度に比べ縮まった。
- ・特に、平成 29 年度全国学力・学習状況調査の国語 A の評価の観点「書く能力」については、前年度の全国平均との差に比べ大きく縮まった。

CRT（全国標準学力検査）では、前年度との比較及び同一生徒の経年比較で、

- ・平成 28 年度末に実施した CRT(全国標準学力検査)の国語において、2 年、4 年、5 年は前年度結果を上回った。同一児童での推移で見ると、3 年、5 年、6 年は前年度結果を上回った。
- ・平成 28 年度末に実施した CRT(全国標準学力検査)の算数において、2 年、4 年は平成 27 年度結果を上回った。同一児童での推移で見ると、2 年、3 年、6 年は平成 27 年度結果を上回った。

という結果であった。

以上の結果より、依然、全国平均を下回っているところが多いが、学年によって、その差を縮めている。特に、全国学力・学習状況調査の国語 A の評価の観点「書く能力」については、大きく改善が見られている。これらのことより、改善の傾向が見られ、授業改善のみならず家

庭学習を軸とした家庭連携や学級力を根幹とする学習環境が、包括的に学力の定着・向上に寄与しているということが言える。

「学力向上システム開発校」交流会に、協力校が参加し、府全域との交流が進み、府内の各地域に実践事例を提供することができた。また、推進地区及び協力校が、全国学力・学習状況調査や京都府学力診断テストの結果、さらには独自のアンケート結果等の分析に基づいた組織的かつ計画的な取組が実施され、府内の各地域に実践事例を提供するなど中心的な役割を果たした。

3. 取組の成果の普及

協力校における取組の紹介、調査研究成果の市内および府下小中学校での情報共有

- ・平成 28 年度と平成 29 年度の 8 月に、連携型小中一貫教育の男山中キャンパス合同研修会（男山中学校・八幡小学校・中央小学校の全教職員が参加）で、「主体的・対話的で深い学びについて ～実践事例から学ぶ～」という演題で、早稲田大学教職大学院の田中博之教授による講演を開催した。
- ・男山中学校キャンパスの研究会において公開授業を実施し、授業改善の取組をキャンパス内の学校に広めた。
- ・山城地方小中高特別支援学校連携推進協議会において協力校で公開授業を行い公開授業後、協力校での取組内容について紹介した。
- ・八幡市教職員研修大会（市内全保幼小中学校の教職員が参加）において、協力校が実践取組内容（研究推進部、学習環境整備部、学級経営部）について発表した。また、その発表内容をホームページ上に掲載して情報提供を行った。
- ・平成 28 年度は「研究実践集」を、平成 29 年度は「研究実践パンフレット」を作成し、取組内容を広めた。
- ・平成 28 年度と平成 29 年度に取り組んできたことについて、平成 30 年 2 月 2 日（金）に実践研究報告会（全学年公開授業、研究報告〈研究推進部、学習環境整備部、学級経営部〉、田中博之教授による講演〈演題 学習指導要領の改訂と「深い学び」による授業改善のあり方 ～資質・能力の育成を基盤として～ 〉）を実施し、研究成果の普及を図った。（参加数 230 人）

○ 今後の課題

- （1）包括的な取組により、学習意欲の喚起に繋がったが、改善傾向が見られている学力の向上が更に進むように取組を継続する必要がある。
- （2）アセスメントシートを活用したユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業について、その効果も含めて更に検証をしていく必要がある。
- （3）京都府教育委員会主催の学力向上に係る連絡協議会や交流会等において、協力校の取組を一層広め、それぞれの学校に合った形での取組に繋げる必要がある。

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	京都府	番号	26
-------	-----	----	----

推進地区名	八幡市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

本市の全国学力・学習状況調査における状況は、平成27年度・平成28年度ともに、小学校では国語、算数ともにA問題は全国平均を上回っているが、活用を主としたB問題においては下回っている。中学校ではすべてにおいて下回り、特に国語B問題において小学校に比べ全国との差も大きい。また、児童質問紙からは、小中学校とも全国の状況と比較して「就寝時刻が遅い。」「家庭学習の時間が少ない。」「携帯電話やスマートフォンの使用時間が長い。」という実態がある。

学力定着に課題を抱える学校（全国学力・学習状況調査において全国平均を下回る）とそうでない学校との平均正答率の差が大きい状況にある。その両者を比較すると、学力定着に課題を抱える学校においては、学力低位層の児童生徒の割合が多く、そのような児童生徒には「主体的に学習に取り組む態度の弱さ。」「家庭学習習慣の定着が不十分。」などの課題が顕著に見られる。その背景には、就学援助受給率の高さやひとり親家庭等の家庭環境の困難さに起因していると思われる内容が少なからず影響していると考えられる。

なお、本市の協力校は、人権教育上の課題を有する学校であり、就学援助受給家庭児童、外国籍児童、特別な支援を必要とする児童が多い学校である。

(学力定着に課題を抱える学校数：9校／所管する小・中学校数：12校)

2. 研究課題への取組状況

(1) e スクール構想⇒学力の向上を目指す効率的で効果的な取組とICT<情報通信技術>を活用した教育の推進

- ・各校の学力向上プランシートに基づき、各校の学力向上に関する計画・取組・成果と課題についてヒアリングを実施した。（年度当初と年度末は管理職を、年度中間については教頭と教務主任を対象）その効果測定として年度末にCRT（全国標準学力検査）を実施する。

(2) 連携型小中一貫教育

- ・各中学校キャンパス（各キャンパス中学校1校・小学校2校）で、学力向上の取組をはじめ

- め、小中9年間を見通した取組を継続的に実施した。
- ・各キャンパスにおいて、小中学校相互の授業参観等を行い、小・中学校9年間を見通した指導について検討を行った。
 - ・平成28年度は、協力校を含むキャンパスにある八幡小学校で行われた『平成27・28年度京都府教育委員会指定「学力向上システム開発校」算数科教育研究発表会』に参加し、問題解決型学習について深く学ぶ機会を持った。
- (3) 市教委指導主事による学力分析(全国学力・学習状況調査、京都府学力診断テスト、CRT(全国標準テスト)とそれに基づく学校への指導・助言
- ・各校の状況を集約し、市内全体の学力分析を行うとともに、集約した結果をもとに「eスクール構想」に係るヒアリング等の機会を捉え協議を進めた。
- (4) 学習支援員配置事業
- ・市単独事業として、学力定着に向けた取組を進める上で必要となる学習支援員を市内小・中学校に適宜配置をした。
- (5) 生活保護受給世帯向けの学習支援(中学生対象のスタディサポート事業<数学・英語>の実施)
- ・「子どもの貧困対策の推進に関する法律」及び「京都府子ども貧困対策推進計画」を踏まえ、子どもの将来がその生まれ育った環境によって左右されることのないよう、また貧困が世代を超えて連鎖することがないよう、教育の機会均等を実質化するため、昨年度は八幡市内1会場で行っていたスタディサポート事業を2会場(本年度受講者数102名)にし、学力向上を図っている。しかし現状としては、102名以外の受講していない生徒を各校で個々学力向上に取り組んでいるものの、いかにして学力定着に課題を抱える生徒の学力を付けていくのかが大きな課題が残ったままである。
- (6) 八幡市オリジナル教材「春休み課題ドリル(国語・算数)」の配付
- ・1年間学習してきた内容が復習できる「春休み課題ドリル(国語・算数)」を市内の全小学校1年生～6年生に春休み前に配付し、春休み期間中に取り組ませ基礎基本の定着を図っている。
- (7) 協力校に対しての指導主事による指導・助言
- ・協力校には日常から指導内容について状況把握を行うとともに、必要な指導・助言を行う体制をつくってきた。
 - ・特に、協力校に指導・助言をいただく大学教授(早稲田大学教職大学院の田中博之教授)が、訪問される機会を中心に担当指導主事等が訪問し、研究会への参加や管理職とともに大学教授との今後の指導について話し合う機会を確保してきた。
 - ・「研究実践集」「研究実践パンフレット」「学習指導案」作成に関して、構成・内容等について指導・助言を行った。
- (8) 協力校における取組の紹介、調査研究成果の市内および府下小中学校での情報共有
- ・平成28年度と平成29年度の8月に、連携型小中一貫教育の男山中キャンパス合同研修会(男山中学校・八幡小学校・中央小学校の全教職員が参加)で、「主体的・対話的で深い学びについて～実践事例から学ぶ～」という演題で、早稲田大学教職大学院の田中博之教授による講演を開催した。

- ・ 男山中学校キャンパスの研究会において公開授業を実施し、授業改善の取組をキャンパス内の学校に広めた。
- ・ 山城地方小中高特別支援学校連携推進協議会において協力校で公開授業を行い公開授業後、協力校での取組内容について紹介した。
- ・ 八幡市教職員研修大会（市内全保幼小中学校の教職員が参加）において、協力校が実践取組内容（研究推進部、学習環境整備部、学級経営部）について発表した。また、その発表内容をホームページ上に掲載して情報提供を行った。
- ・ 平成 28 年度は「研究実践集」を、平成 29 年度は「研究実践パンフレット」を作成し、取組内容を広めた。
- ・ 平成 28 年度と平成 29 年度に取り組んできたことについて、平成 30 年 2 月 2 日（金）に実践研究報告会（全学年公開授業、研究報告〈研究推進部、学習環境整備部、学級経営部〉、田中博之教授による講演〈演題 学習指導要領の改訂と「深い学び」による授業改善のあり方 ～資質・能力の育成を基盤として～ 〉）を実施し、研究成果の普及を図った。（参加数 230 人）

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 成果等の把握

- ・ 協力校の実践研究の状況把握については、担当指導主事の訪問（公開授業、校内研究会、実践研究報告会等への参加）、「eスクール構想」に係るヒアリングによる把握、「研究実践集」「研究実践パンフレット」の作成過程等で行った。
- ・ 全国学力・学習状況調査、京都府学力診断テスト等の結果を基に成果を把握した。全国学力・学習状況調査の結果については、八幡市教育委員会発行の広報誌「くすのき」で全児童生徒の保護者に配布して、成果と課題を知らせた。記載内容は、下記のとおりである。

平成 29 年度 全国学力・学習状況調査の結果

文部科学省による全国学力・学習状況調査が、今年も 4 月に小学校 6 年生、中学校 3 年生を対象に実施されました。教科に関する調査では、国語と算数・数学は、主として A 問題（「知識」に関する問題）と B 問題（「活用」に関する問題）の二種類が実施されました。例年同様、生活環境や学習環境などに関する質問紙調査も行われました。

教科に関する調査より

【小学校】八幡市全体としては、国語・算数とも、全国平均を下回りました。国語 A では、記録や報告を読んで、文章中のどの段落を読めば必要な情報が得られるのかを判断することに課題が見られました。また、国語 B では、グループで話し合いを行う時に、友達の助言を取り入れながら、自分の伝えたいことが伝わるように話の内容を工夫し、場面に応じた言葉遣いで書くことに課題が見られました。算数 A では、 $6 \times 0.5 + 2$ など加法と乗法が混合している整数と小数の計算が全国平均を上回りました。計算問題で正答率が上がった一方で、算数 B では、問題文を読んで、正しい式を選択する問題や、式の中の数字がどのような意味を表しているのかを言葉で書くことに課題が見られました。

【中学校】全体としては、国語・数学とも、全国平均を下回りました。国語 A では、雨で運動会がエンキになる、組織のキボを大きくするなど文脈に即して漢字を正しく書くことに課

題が見られました。国語Bでは、比喻を用いた表現に着目し、感じたことや考えたことを書くことに課題が見られました。全国より高かったのは数学Aの、方程式を解いたり、分数を計算したりする基礎的な問題です。数学Bで全国平均と比べて特に低かったのが、与えられた情報から資料の傾向を読み取り、判断した理由を説明するなどの資料を活用する問題で課題が見られました。

質問紙調査より

小学校、中学校ともに、2時間以上ゲームやインターネットをしていたり、携帯やスマートフォン等を使用していたりする児童生徒の割合が全国と比べて高くなりました。また、学校の授業以外に勉強をしていないと回答している割合も、全国平均と比べて高くなりました。授業以外の勉強をしない、または、学習の時間が短いと答えている児童生徒に、いかに学習させていくのが課題であると考えています。

調査結果を踏まえて

調査結果から見られる課題等を踏まえ、学習支援員等を活用した習熟の程度に応じた指導や少人数指導、発展的な学習、補充的な学習などの個に応じた指導を実施し、授業改善を行ったり、教職員の授業力の向上の研修に取り組んだり等学力の向上を目指します。また、保護者の皆様や地域等の御理解と御協力のもとに十分連携をとりながら、放課後における学習習慣や生活習慣の改善に向けた取組を充実させていきたいと考えています。（学校教育課）

(2) 成果の検証

- ・協力校においては、授業力向上に向け校内及び管外の研修を計画的に行い、授業改善の取組につながることができた。
- ・協力校においては、学校の中すべてが学びの場で、あらゆる教育活動を通して、子どもたちが「学校に行くのが楽しい」と実感できる楽しさいっぱいの学校づくりを目指してる。保護者対象の児童満足度アンケートで、どの項目についても昨年度より増えた。特に、「子どもが授業が分かりやすいと言っている」の項目が大幅増である。これは日々授業で工夫改善を行ったからである。
 - 子どもは学校に行くのが楽しいと言っている。 86.7% → 90.0% (3.3%増)
 - 子どもは、授業が分かりやすいと言っている。 75.2% → 88.9% (13.7%増)
 - 先生は、読み・書き・計算など基礎学力定着のため、きめ細かい指導をしている。 86.9% → 94.5% (7.6%増)
 - 先生は、子どもの困ったことや、悩みなどを理解し、誠実に対応しようとしている。 90.1% → 96.7% (6.6%増)
 - 先生は、子どものよさや努力したことなどをしっかり認めようとしている。 96.7% → 98.9% (2.2%増)
 - 先生は、仲間はずれやいじめなどを許さない一人一人を大切に学級づくり・学年づくりをしようとしている。 88.9% → 96.7% (7.8%増)
 - 学校の雰囲気はよく、子どもは生き生きとしている。 80.4% → 92.2% (11.8%増)
 - 学校は、保護者に対して誠意を持った対応をしたり、相談に応じたりしている。

93.5% → 97.8% (4.3%増)

- ・連携型小中一貫教育の中学校キャンパスの研究会において公開授業を実施し、協力校における授業改善の取組を各校に広めた。
- ・平成 28 年度と平成 29 年度に取り組んできたことについて、実践研究報告会（全学年公開授業、研究報告、田中博之教授による講演）を実施し、研究成果を各校に広めた。協力校での国語アンケート（平成 29 年 7 月 → 平成 29 年 12 月実施）では、国語が好きな児童が増え（52.9% → 74.8%）、文章を書くことが好きな児童が増えている（52.2% → 71.1%）。
- ・全国学力・学習状況調査、京都府学力診断テスト結果から見られる課題等を踏まえ、学習支援員等を活用した習熟の程度に応じた指導や少人数指導、発展的な学習、補充的な学習などの個に応じた指導を実施し、授業改善を行った。また、学校と家庭とが連携をとりながら、放課後における学習習慣や生活習慣の改善に向けた取組を進めた。さらに教職員の授業力の向上の研修に取り組み、学力の向上を目指したが学力課題が残る。八幡市内の全体的な傾向として、正答数の相対度数分布からは、学力低位層の増加が見られる。全国、府と比較して、八幡市内の小中学校どちらも学力上位層は低い割合を、学力低位層は高い割合を示している。国語・算数とも小学校 4 年から学力低位層の割合が高く、中学校においては、さらに学力低位層が高くなる傾向にあることから、小学校の低学年から、ユニバーサルデザインの視点に立った授業改善を図り、すべての子どもにわかりやすい授業を継続して進めていく。また、学力低位層には、家庭環境の困難さ（就学援助受給率の高さやひとり親家庭等）起因しているのが背景にあると思われるので、教育・福祉等の各機関が協働して、総合的・効果的に施策を実施していく。
- ・協力校での取組結果として、すべての学級において、学級力向上の取組を進め、基盤となる学級経営が安定した状況の中で、ユニバーサルデザインの視点及び主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善の取組を進められるようになり、学校全体に、「もっと勉強ができるようになりたい」という雰囲気が出た。そして課題のある児童も、「分かりたい」という意欲が高まっている。「書くこと」に課題があったが、「書くこと」について独自の系統表を作成し、それに沿って指導した結果、平成 29 年度全国学力・学習状況調査の国語 A の評価の観点「書く能力」については、前年度の全国平均との差を大きく（21 ポイント）縮めることができ改善が見られた。家庭学習の取組も進み、「家すた（家庭自主学习）」の取組については数年かけて定着し、内容も少しずつ充実してきており、放課後の補習も含めて、学力向上、主体的な学びに結びついてきている。

4. 今後の課題

本年度の取組や成果を踏まえ、次の課題を中心に協力校と連携した研究を進める。

- ・協力校の研究テーマである「書くこと」について、「書くことの系統表」をもとに、指導の系統性を理解した上で、授業改善を図り、いかに学力向上につなげていくかが課題である。手立てとして、低学年では、書くことに慣れるための視写、語彙を増やすために、辞書で調べた言葉をノートに書き、自分だけの辞書づくり（ことば貯金）、中学年では、はじめ・中・終わりの構成を意識した「はがき新聞」づくり、文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりしての 100 文字作文の取組、高学年では、引用したり、図表や

グラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるような「はがき新聞」づくり、表現の効果などについて確かめたり工夫したりしての100文字作文の取組に加え、書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して友達と助言し合いことに取り組んでいく。

- ・「学級力向上プロジェクト」を継続して取り組み、学級力（学び合う仲間としての学級のなかで、支え合い協働してチャレンジする目標を持ち友達との豊かな対話を創造して、規律を守り協調的な関係を創り出そうとする力）をいかに高めていくかが課題である。手立てとして、学級力アンケートによる学級力の自己評価、学級力レーダーチャートをもとにして話し合うスマイルタイム、そして学級力向上のために児童が主体的に取り組むスマイルアクションという3つの活動を、R-PDCA（診断・計画・実施・評価・改善）サイクルに沿って意図的・計画的に（1年間のプロジェクトの流れ＜学級の自己評価アンケート⇒学級力レーダーチャートによる話し合い⇒学級で決めた目標に向けて取組を行う⇒成果と課題を話し合い、改善していく＞）実践していく。
- ・全国学力・学習状況調査児童で活用を主としたB問題に課題がある。手立てとして、例えば、活用力（思考力・判断力・表現力）の向上を図るために、多様な学習集団（ペア、グループ等）を活用して発表や説明、話し合い活動等の充実を図り、授業改善を進めていく。
- ・学力に課題が大きい児童に対して、学校と家庭が連携した取組を通じてどのようにして学力定着を図っていくのが課題である。手立てとして、学校と家庭の役割を明確にし、特に学力に課題が大きい児童に対しては、個別に保護者啓発を継続して行っていく。学校としては、アセスメントシート等を活用し、継続して個に応じたきめ細かな指導を行っていく。
- ・学習習慣や家庭学習の充実について、今後どのように充実させていくのが課題である。手立てとして、児童生徒質問紙からは、小中学校とも全国の状況と比較して「就寝時刻が遅い。」「家庭学習の時間が少ない。」「携帯電話やスマートフォンの使用時間が長い。」という実態があるのを踏まえ、保護者に対して、家庭学習の手引き等を通して、家庭学習の必要性や重要性について周知徹底を図り、家庭との連携を強化していく。
- ・協力校で得られた成果を、学力定着に課題を抱える他校にどのように広げていくかについては、協力校に授業参観の機会を設けたり、市の研修大会にて、全教職員対象に、協力校の実践研究の取組について紹介したりしていく。また、指導主事の学校訪問を通して、各学校に対して情報提供と適切な指導助言を行っていく。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	京都府	番号	26
-------	-----	----	----

協力校名	京都府八幡市立中央小学校
------	--------------

1. 当初の課題

(1) 全国学力・学習状況調査や京都府学力診断テストの結果は、全国や京都府の平均正答数・率を下回っており、基礎・基本に関する問題、活用に関する問題ともに課題がある。特に、文を読んで解く問題があると、解こうとしない児童が多い。また、語彙が少なく書くことに対して苦手意識を持っている児童が多い。その原因として、次の課題が見られる。

ア 主体的学習に取り組む態度や、基礎・基本のA問題とともに、活用力を見るB問題に課題がある。

イ 家庭での学習時間の調査では、「全くしない」や「30分未満」の児童が多い。家庭内に学習ができる環境でない家庭が多い。

ウ “学級の状態”が、学力の定着の遠因になっている。

エ 外国人（中国、パキスタン、ポリビア、フィリピン、タイ、ロシアなど）の親を持つ児童や、特別に支援の必要な児童（発達障害のある児童も含む）が増加している。

オ 子どもの貧困問題の実態がある。

(ア) 就学援助受給率（要保護家庭・準要保護家庭）4割強で、家庭の経済状況が学力に影響している。

(イ) 課題の根本に幼少期からの育ちの問題がある。「発達資産（外的資産、内的資産）」をマイナス要因からプラス要因へ引き上げなければならない問題がある。

2. 協力校としての取組状況

(1) 授業改善の取組

ア ユニバーサルデザインの視点に立った授業改善

本校では、子ども一人一人の個性と能力に応じた教育を行うために、平成26年度から全学年でアセスメントシートを活用している。このシートは、学習につまずくおそれのある児童を事前に予見し、予防的にかかわることができるようにするとともに、学級集団の学習にかかわる諸能力の全体的な特徴を把握し、それに応じた指導・支援を導き出せるものである。

・学級の児童がどのような傾向を持っているのか、児童の実態を総合的に把握し、学級での指導に役立てている。

- ・「手立てのポイント」や「手立ての具体例」などを参考にし、授業等で「個に対する手立て」を考え指導に活かしている。
- ・アセスメントシートの結果を学習指導案、学級経営案に記入し、授業や学級経営に活かしている。

イ 主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善

- ・主体的・対話的に深く学び合うための授業改善について、国語科の「書くこと」において全学年、全クラスで公開授業を行い、早稲田大学教職大学院の田中博之教授を外務講師として招聘し、指導助言を受けながら、校内研究を進めている。
- ・授業での話し合いでは、役割をはっきりさせるため、3人<司会・記録・報告>組（トリオ）で行っている。
- ・教師自身も研究会に主体的に参加するために、事前研では、指導案の検討は全員で行い、授業のゴールを明確にし、授業の中でのしかけ・山場の設定、課題のある児童への手立てを2つのグループに分かれて検討している。事後研では、グループで考えた手立てが有効であったか、しかけ・山場の設定はどうであったかを話し合い、次の授業研にどうつなげていくかをまとめている。
- ・授業評価シートをもとに授業改善を進めるため、全教職員が授業を参観し、授業評価アンケートを実施している。授業評価結果を可視化できるレーダーチャート<レーダー型グラフ>で示し、良い点や改善点を知り、授業改善につなげている。

科学学習指導案

指導者 名

対象 第○学年 ○組 ○名

日時 平成28年○月○日 (○曜日) 第○校時 ○:○~○:○

場所 第○学年 ○組 教室

単元・教材名

単元について

(1) 児童観

学級の実態を入力した、(例)は消してください。

アセスメントシート

①アセスメントシートの結果より(例)	一言授業に必要な児童の力	配慮が必要	人数	十分に適応	人数
1 動機付けを促すこととして準備を促すこと	★▲○○○	4	○	1	1
2 役割を押し出すこと	▲○○○○○○○	9	○	0	0
3 互に内容を少しの覚悟しておくこと	★○○○○○	5	○	4	4
4 互いの内容を覚悟して、必要な情報を取り出すこと	○○○○○○○○○	8	○	0	0
5 互いに聞かれた場合状況を理解すること	○○○○○	3	○	0	0
6 役割を促して、その構成を理解し、推察すること	▲	1	○	0	0
7 注意を促し、必要とされる情報を提供すること	★○○○○○○○	7	○	1	1
8 互いの内容を少しの覚悟しておくこと	★▲○○○○○○○○○	10	○	0	0

◇共通確認してきたこと

- ☆3人組(トリオ)での話し合い 役割をはっきりさせる。
- ☆動機付けを大切にす。
- ☆ゴールを明確にする。

授業評価シート

教科() 年 組 授業者・参観者()

教師による相互評価 ~授業改善に~

	視点	そう思う	だいたい そう思う	あまり 思わない	そうは 思わない	
1	授業規律	児童一人一人に学習の基本的なルール(学習規律や話し方・書き方等)を身に付けさせている。	4	3	2	1
2	意欲を引き出す場面設定	児童の意欲を引き出す場面を設定している。	4	3	2	1
3	めあて・見通しの設定	本時のめあてや見通しが児童にわかりやすいものとなっている。	4	3	2	1
4	教材・教具の工夫	効果的な教材・教具の工夫がなされている。	4	3	2	1
5	発問・指示の適切さ	学習の深化発展を促す発問や適切な指示ができています。	4	3	2	1
6	板書の工夫等	1時間の学習が振り返るよう整理して板書を行っている。	4	3	2	1
7	山場等の設定	本時のめあてを達成できる場面や山場を設定している。	4	3	2	1
8	考えたり、学び合ったりする時間の確保と深い学び	自分の考えを表現したり、互いに学び合う時間を確保したりして、思考を深めさせている。	4	3	2	1
9	個に応じた指導・対応	児童の学習・活動状況に応じて褒める、励ます、助言などを行うなど個に応じた指導・対応ができています。	4	3	2	1
10	振り返り	本時の学習で学んだことを振り返り、新たにわかったこと、まだわからないことなど自己評価させている。	4	3	2	1

★授業メモ

◎本時の授業で良いと思われる点

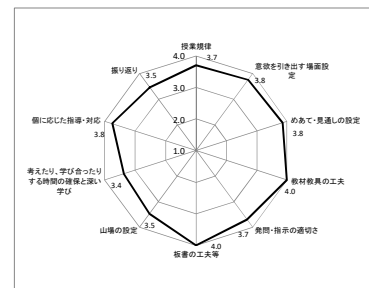
△本時の授業で改善が必要と思われる点

□その他、気付いた点(自由に)

授業評価結果

平成28年11月16日 教科(国語)

1年2組



◎よいと思われる点

- ・学習環境が整えられていた。
- ・レベルに応じた課題が用意・準備されており、児童は、ヒマを待たずことなく作業に取り組み始めている。
- ・めあてで、一言決まるところ子ども自身に書かせるところ。
- ・UDの視点で支援がたくさん盛り込まれていて勉強になった。
- ・「いっせいで、どん」のおかげで、全員参加ができてよかった。
- ・共通の話題があったこと、ワークシートが冊子など工夫されていてよかった。
- ・展開がかわかやすく進捗に促されていた。
- ・カゴや筆箱を片付けるなど、机上の整理が徹底されていた。
- ・ワークシート・短冊・資料、板書、書き出しが習字の手への支援、シールを使った交流、どれも工夫されていて、子どもたちが意欲的に集中して学習に取り組んでいた。
- ・一人チャレンジ、みんなでチャレンジが良かった。

△改善が必要と思われる点

- ・「仕事」ど「つくり」の距離を持たせられたよかったのになあ。
- ・最後の意思伝達で、何が伝っていたかを考えたよかったと思う。
- ・グループで交流するとき、順番にグループに関心する声で読み、シールをもらうというふうにするのは、難しかった。

□その他の、気付いた点

- ・作業をするに当たって、目標な児童には、手立てを考えていて、全員が個に応じた取組をしており、授業の終わりにには、いい顔をしていた。
- ・教材工夫がとでもされていて勉強になった。
- ・統合的な型学校で統一したい。

授業評価結果(レーダーチャート)

(2) 基礎学力定着の取組

ア 「家すた(家庭自主学習)」の取組

本校の実態として、家庭学習が定着していない実態がある。学校で学習したことを復習する、自分の興味関心のあることをさらに調べる等、1年生から6年生まで全校一斉に「家すた」専用のノートを作って家庭学習に取り組んでいる。

家すたを活発にするために、毎月30日を家スター祭として設け、この日をメ-cutとした一か月の家すたを表彰した。全校児童の意識を高めるために、“家スター祭の歌”を作り、1週間前からお昼の放送で流している。

また、毎月行われる児童集会「すまいる集会」で、一か月間家すたに一生懸命取り組んだ児童を表彰したり、その家すたノートを実際に紹介し、よい家すたノートの書き方や、取り組むテーマの例などを広める機会を設けたり

している。表彰者には、家すたノートに貼る用のシールを授与し意欲を高めている。家すたを浸透させるには、家庭の協力も必要なため、月1回の家すた通信を発行し、啓発を行っている。保護者の声としては、「どんなことを家すたでやらせればいいのか分からない」というものが多い。そのため、他の児童に参考になる家すたのノートを通信で紹介している。学校でどのような学習をしているのかを知ってもらい、家庭と連携しながら取り組んでいる。



イ 「スタディ道場(補習)」の取組

学習に困難を抱える児童を対象に、学力の底上げを目的として、「スタディ道場」と称した補習を行っている。毎週、火曜日に全教職員で取り組み、今年度は算数の計算領域を中心に学習している。また、個人ファイルを用意し、毎回の課題を綴じて自分自身の頑張りを振り返られるようにしている。

補習では、プリント教材を中心に、前学年までの復習や現在の学習内容の補充、次時の予習などを取り入れている。時には、個別の課題に対応したプリントを用意して、個に応じた学力の底上げを図っている。

参加している児童は、次時の予習ができることで自信を持って授業に参加できるようになり、補習で学んだことが授業に活かされるため、やる気につながっている。また、授業中の発表が増えた児童もいて、学習に課題がある児童が主体的に学習に取り組めるようになり、とても有効だった。児童は補習を楽しみにし、前向きに取り組んでいる。

ウ 昼すたでい(昼すた)の取組

本校の特色ある取組の一つに、昼の学習タイムに位置付けているモジュール学習がある。これを本校では「昼すた」と呼び、言語力育成のために全校で取り組んでいる。毎週、月・火

・木・金の昼の時間を活用し、時間は13時35分から13時50分までの15分間の取組である。短時間だが、集中して行っている。以下、各曜日の取組である。

- 月・・・漢字・漢字フラッシュカード・辞書引き
- 火・・・フリートーク
- 木・・・文法
- 金・・・文章読解

(3) 学級力向上の取組

ア 学級会における話し合い活動の構造化

個々の意見を尊重し合い、互いの立場や意図をはっきりさせながら話し合える児童の育成を目指して学級活動を進めている。学年進行により、クラス集団や担任が替わっても同様に話し合い活動が進められるように、本校の児童の実態を把握し、全ての学年において系統立てた指導が行えるように、学級会進め方シートや板書計画の型を学級経営部より提案し、活用できるように環境を整備し、話し合い活動の構造化を進めている。

イ 学級力向上プロジェクト

学級力向上プロジェクトとは、児童が学級づくりの主人公となって、目標達成力、対話創造力、協調維持力、安心実現力、そして規律遵守力からなる学級力を高めるために、学級力アンケートで自分たちの学級の様子をセルフ・アセスメント

(自己診断・自己評価) することを通して、毎日の学習や遊びの中で意図的・計画的に取り組む実践的な仲間づくりの活動である。

具体的には、この学級力向上プロジェクトは、クラスの児童が、「笑顔があふれ、明日からも来たくなる明るい学級」を協力してつくり上げていく協同的な学習である。また、学級力に含まれる5つの力、目標達成力、対話創造力、協調維持力、安心実現力、そして規律遵守力【目標をやりとげる(達成力)、話をつなげる力(対話力)、友達を支える力(協調力)、安心を生み出す力(安心力)、きまりを守る力(規律力)】を示した学級力アンケートの結果をレーダーチャートで可視化して診断し、その改善に向けて子どもたちが動き出す、自律的な学びである。

学級力アンケートによる学級力の自己評価、学級力レーダーチャートをもとにして話し合うスマイルタイム、そして学級力向上のために児童が主体的に取り組むスマイル・アクションという3つの活動を、R-PDCA(診断・計画・実施・評価・改善)サイクルに沿って意図的・計画的に実践する協同的な問題解決学習である。各学期でこのサイクルを1回実施する。

学級力アンケート

【学年】 月 日

※ このアンケートは、あなたも学級をよりよくするためにみんなの意見を話し合うものです。それぞれの項目の4～1の数字の裏で決まる1～5の数字を書き込んでください。

4 3 2 1

1. 学級でよくあること、行っていること、進んでいること、進んでほしいこと、進んでほしいこと、進んでほしいこと

2. 学級でよくあること、行っていること、進んでいること、進んでほしいこと、進んでほしいこと、進んでほしいこと

3. 学級でよくあること、行っていること、進んでいること、進んでほしいこと、進んでほしいこと、進んでほしいこと

4. 学級でよくあること、行っていること、進んでいること、進んでほしいこと、進んでほしいこと、進んでほしいこと

5. 学級でよくあること、行っていること、進んでいること、進んでほしいこと、進んでほしいこと、進んでほしいこと

6. 学級でよくあること、行っていること、進んでいること、進んでほしいこと、進んでほしいこと、進んでほしいこと

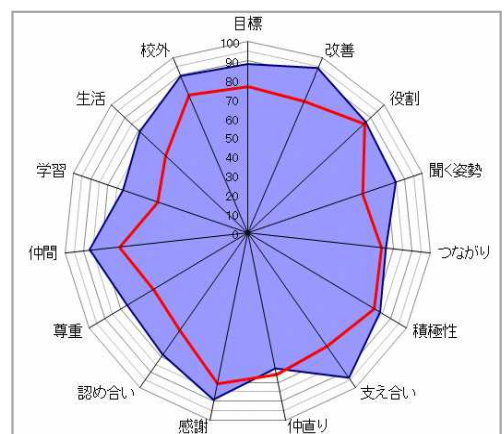
7. 学級でよくあること、行っていること、進んでいること、進んでほしいこと、進んでほしいこと、進んでほしいこと

8. 学級でよくあること、行っていること、進んでいること、進んでほしいこと、進んでほしいこと、進んでほしいこと

9. 学級でよくあること、行っていること、進んでいること、進んでほしいこと、進んでほしいこと、進んでほしいこと

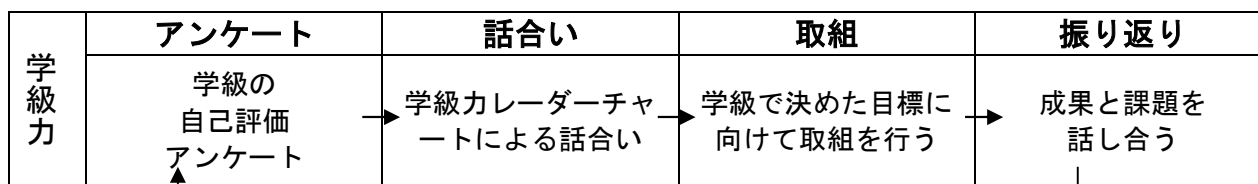
10. 学級でよくあること、行っていること、進んでいること、進んでほしいこと、進んでほしいこと、進んでほしいこと

学級力アンケート



学級力レーダーチャート

プロジェクトの流れ



ウ フリートークの取組

フリートークは「前向きに他者と関わり、行動する姿勢を育むために、コミュニケーションの具体的な手法を学んだり、段階を踏んで自分の考えを整理し話すための力を育成したりする」ことを目的として取り組んでいる。

目的達成のため、1年目（平成27年度）は、「自分の思いを出せるという安心感や伝えることの楽しさを味わう。」2年目（平成28年度）は、「思いを伝えることの楽しさを味わいながら、学年や学級、個人の実態に合った内容で、コミュニケーションの具体的な手法を学ぶ。」3年目（平成29年度）は、前年度までに学んだことを活用し、「さらに思いや考えを伝えたり、聴いたりすることの楽しさを味わう。」というプロセスで取り組んでいる。

3. 取組の成果の把握・検証

○平成29年度全国学力・学習状況調査の国語A・Bにおいて、平成28年度の全国平均との差を国語Aは2.7ポイント、国語Bは0.3ポイント縮めることができた。

○平成29年度全国学力・学習状況調査の国語Aの評価の観点「書く能力」については、平成28年度の全国平均との差を21ポイント縮めることができた。

○平成28年度末に実施したCRT(全国標準学力検査)の国語において、2年は1.3ポイント、4年は4.2ポイント、5年は5.2ポイント平成27年度結果を上回った。同一児童での推移で見ると、3年は0.1ポイント、5年は4.2ポイント、6年は4.7ポイント平成27年度結果を上回った。

○国語アンケートの下記の項目において、「当てはまる・どちらかと言えば当てはまる」と答えた児童の割合が増えた。

- ・国語は好きです。52.9% → 74.8%
- ・文章を書くことが好きです。52.2% → 71.1%
- ・自分の考えを話すことが好きです。49.6% → 71.5%
- ・友達と話し合っ、文章を作ったり、まとめたりすることが好きです。60.1% → 76.8%

○平成29年度は、平成27、28年度のように学級の状態が落ち着かないという学級はなく、すべての学級において、学級力向上の取組を進め、基盤となる学級経営が安定した状況の中で、ユニバーサルデザインの視点及び主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善の取組を進められるようになった。

○学校全体に、「もっと勉強ができるようになりたい」という雰囲気できた。課題のある児童も、「分かりたい」という意欲が高まっている。

○研究授業のスタイル、事前研や事後研の持ち方の改善により、教師も主体的に授業改善に取り組めるようになり、授業ごとに成果と課題をまとめ、次につなげることができている。ま

た、学力テストの分析では、学年の系統を意識し、組織的な授業改善の方法について考えることができている。

- 「家すた（家庭自主学习）」の取組については数年かけて定着し、内容も少しずつ充実してきており、放課後の補習も含めて、学力向上、主体的な学びに結びついてきている。
- 「書くこと」「対話力」についても、本校独自の系統表を作成することができたことは、大きな成果である。
- 中学校キャンパス内でお互いに授業を参観し合ったり、教科指導や生徒指導について協議するキャンパス会議を行ったりすることで、小中9年間を見通した取組が進んだ。

4. 今後の課題

- 授業や学習に向かう力はついてきたが、今後、学力テスト等において、点数に表れるように身に付いた力と課題となっている部分を焦点化し、さらに学力向上に取り組んでいく必要がある。今回の研究実践では、「書くこと」に焦点を当てて取り組んでおり、書くことへの抵抗感は減少してきてはいるが、「読むこと」の力を付けることやB問題のような活用型、記述式の問題に対応できるような力を付けていくための取組について効果的な方法を研究していく必要がある。
- 学級力向上の取組(学級力向上プロジェクト、学級会)については、同じ流れで学習を進めていくことで、話合いがマンネリ化してしまうため、行事と話合いをしっかりと絡めて、児童が積極的に取り組んでいけるように、学級力向上プロジェクトの実施時期をしっかりと検討する必要がある。また、学級担任任せではなく、学校全体で、統一して取り組んでいくために、担当部としての意図的な働きかけが必要である。
- 学習環境整備部の取組で、学習環境のユニバーサルデザイン化や言語に関する取組を進め、学習環境を整えたことにより学力が上がるのかを検証していく方法を考える必要がある。
- 学習面、行動面等で支援が必要な児童に支援シートを作成しているが、児童が出すサインに気づき、つまずきや困難などの状況をしっかりし把握して、適切な支援がより一層行えるよう、全教職員の共通認識のもとに進めていく必要がある。